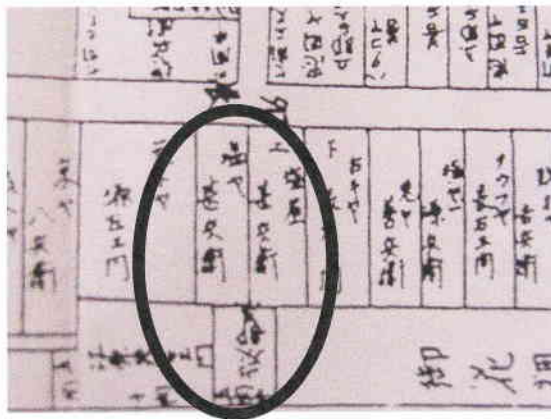


## 吉田松陰宿泊の地 塩屋甚兵衛邸跡(久住清子邸)

岸和田市本町7-3

- ▶ 嘉永6年(1853)2月23日、吉田松陰は森田節齋と共に岸和田に到着します。ここ塩屋甚兵衛邸を借り宿泊先としました。岸和田には2月23日から3月3日まで長期にわたり滞在し、岸和田藩の尊王派志士と会談しています。



## 吉田松陰訪問の地 岸和田藩講習館跡

岸和田市北町16(市立中央保育所)

## 儒者 相馬九方住居跡

- ▶ 嘉永6年(1853)2月23日、岸和田に到着した吉田松陰と森田節齋は、その日の夜、岸和田藩に招かれている儒者 相馬九方(そうまきゅうほう)の寓居先である岸和田藩校「講習館」を訪問しました。松陰は「発丑遊歴日録」に、宿所に帰ったのは午前2時と書いています。翌日、相馬九方が松陰の宿所を訪ね、その夜、再度相馬九方の寓居先を訪問しました。この時は夜を徹し、松陰が宿所に戻ったのが午前10時だったと「発丑遊歴日録」に書き記しています。2月26日にも相馬九方を訪ねています。その時には、岸和田藩の七人庄屋のうちの一で、岸和田城下に住む岸 長太郎に出会います。



相馬九方寓居跡

梅谷卓司著の「渦潮の譜 岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」(朱鷺書房)のP113より

到着早々、講習館の新館に案内される節齋と松陰は、ふと通りすがりの一室の前で立ち止まった。その戸に筆太な落書ありー『事たらぬことこそなけれ、柴の戸に花もありけり月もありけり』と。九方の一首に違いない。節齋は「面白い。この部屋が気に入ったぞ。幸い炉も切ってござるし、暖かそうじゃ」と、独り合点で座をしつらえさせるのだった。琉球縁なしの粗末な六畳間である。この夜の談義は、三人ともせんべいを嚙じり番茶をすすりながら、白々明けまで時の経つのも忘れて続けられた。

## 相馬九方

相馬九方は、讃岐高松に生まれ、中山城山に徂徠学を学んだ後、京都で学問修行を重ねました。嘉永4年(1851)、京都の蘭医新宮涼庭の推挙によって岸和田藩校講習館の教官となりました。彼が初めて岸和田に来て元藩主長慎に面会した時、長慎より「人を知らざるを憂う」と認めた書を下されました。「これまで貴方のような素晴らしい人物を知らなかったことが残念でならない」との意味です。ペリー来航後の騒然とした政情の中で、九方は講習館において多くの人材を育てるとともに、藩政にかかわる意見も求められるなど、次第に藩政に深く関与するようになりました。そうした彼の立場から藩主後継者をめぐってお家騒動に巻き込まれ、一時投獄されるという憂き目にもあっています。

但馬国宿南村(現在の兵庫県養父市)で私塾「青谿書院」(せいけいしょいん)を開いた池田 草庵(いけだ そうあん)は、天保2年(1831)、村を訪れた相馬九方の教えを受けています。

墓所は梅溪寺(岸和田市南町43-8)。※情報提供:北浦康男氏

## 28 岸和田城

岸和田市岸城町9-1

- ▶ 岸和田城は、建武元年(1334)楠木正成の家臣である和田高家によって築られました。この時築かれた岸和田城は、現在の城から約500m東にありました。天正13年(1585)、豊臣秀吉の家臣である小出秀政が3万石で入封し、本格的な城砦として5重5階の天守に大改修され威容を誇りました。元和5年(1619)、小出氏が転封となり松平康重が入封します。松平康重は惣構えと城下町を整備しました。幕府から石垣奉行として三好長直が来て石垣修理並びに浜の石垣筋を造りました。寛永17年(1640)、摂津高槻城より岡部氏が入城し、以後岡部氏13代の居城となります。文政10年(1827)、落雷のため天守が焼失し、以来再建されませんでした。現在の天守閣は昭和29年(1954)に再建された3層の模擬天守です。岸和田城の別称は「猪伏山(いぶせやま)ちきり城」で、「ちきり」とは、機(はた)のたて糸をまく器具で、本丸と二の丸を重ねた形が「ちきり」に似ているところから由来するといわれています。ちきり城は「千亀利城」または「蝮亀利城」と書きます。



## 幕末の岸和田藩

天保8年(1837)大塩平八郎の乱が起こり、岸和田藩は大坂城の守備にあたりました。

第11代藩主 岡部長発は嘉永5年(1852)に藩校「講習館」を開きました。

第12代藩主 岡部長寛は慶応2年(1866)藩校を増築し「修武館」と改称しました。

幕末の動乱の中で藩論は勤王・佐幕両派に分かれます。慶応4年(1868)、戊辰戦争に新政府軍として参戦しました。

明治4年(1871)廃藩置県により岸和田県となります。その後、堺県を経て大阪府に編入されました。



## 29 岸 琴 泉 墓 所 ( 正 覚 寺 )

岸和田市宮本町27

- ▶ 岸和田藩七庄屋のうちの一人岸 琴泉(長太郎)は、文人画家としても才能を発揮しました。文政8年(1825)及び同12年(1829)、頼 山陽が岸 琴泉を訪れています。また、嘉永6年(1853)3月1日、岸和田滞在中の吉田松陰が岸 琴泉邸を訪れています。岸和田を訪れた際、勝 海舟が宿泊したという一説もあります。



岸 琴泉墓碑



梅谷卓司著の「渦潮の譜 岸和田藩儒・相馬九方と幕末の学者群像」(朱鷺書房)のP122より

土佐守一行の宿舎は、大庄屋七人衆の屋敷にそれぞれ割り当てられている。夜に至り、九方はその内の一軒、岸 長太郎邸へ勝 麟太郎を訪ねた。見るからに、「選良」の人生を駆け抜けていく、端麗な秀囲気を漂わせていた。しかも肩肘はらぬ座談から入ってゆく……

松陰は「癸丑遊歴日録」に次のように記載しています。

二月二十六日

晴。相馬の宅を訪ひ、庄屋岸長太郎に逢ふ。岸和田は五萬三千石、七庄屋 中左近・根来藤右衛門・岸長太郎等 あり。是れ其の一なり。其の容貌を相するに、頗る自ら尊大なり。」

岸 琴泉(長太郎)は、現在の岸和田市宮本町に住んでいましたが、場所の確定はできていません。



岸 琴泉住居跡周辺(古風な家がまだ残っている岸和田市宮本町)